中国の大学における通訳コースの受講生たちの意識調査

—2011年度広東外語外貿大学日本語学部アンケートより—

程　　亮*　辛　　暨　梅**

A Survey on Undergraduates' Perception of the Japanese Interpretation Course

—Based on a Questionnaire in Guangdong University of Foreign Studies in 2011—

CHENG Liang*　XIN Jimei**

Abstract

With the further implementation of the Reform and Open-Up policy, demands in the interpreting market are growing annually. Therefore, much more importance should be attached to Japanese-Chinese interpreting teaching, which aims at developing students' practical ability as well as meeting the demands of the market. Problems such as how to understand the real demands of the students and how to teach practical and professional skills need exploring.

To find out the current situation of translation and interpreting teaching for Japanese majors, a survey was carried out. A questionnaire was given to juniors majoring in Japanese and attending an advanced interpretation course in Guangdong University of Foreign Studies. The questionnaire was based on a questionnaire provided by the Japan Association for Interpretation Studies in 2007.

In accordance with the data from the survey, this paper will probe deeply such problems as the orientation of the interpretation course; the students' ability to apply both Chinese and Japanese to interpreting; the problems with the teaching methods in the interpretation course; and the problems in different phases of the teaching process. Thus the current situation of Japanese interpretation teaching at the undergraduate level will be presented, and some suggestions will be proposed for realizing an individualized method of instruction in interpretation teaching.

キーワード：通訳教育、通訳教授法、意識調査、日本語力の強化、異文化コミュニケーション
Key words: interpreting teaching, the teaching methods of interpreting, attitude survey, strengthening Japanese ability, intercultural communication

*本学客員研究員　広東外語外貿大学東方語言文化学院日本語学部講師
**広東外語外貿大学南国商学院日本語学部教員
連絡先：程　亮　〒510420　広東外語外貿大学東方語言文化学院
200511345@oamail.gdufs.edu.cn

1．はじめに

中国経済が高度成長を遂げる中、通訳産業の需要も急速に伸び、輸出大国の中国とほかの国・地域との貿易往来が一層活発化するため、中国の大学はさらに多くの通訳翻訳専攻が必要となる。2006年、中国教育部が13大学で学士レベルの翻訳学科[1]の設立を認可した。更に、2007年、国務院学位委員会が15大学の通訳翻訳修士号（MTI）[2] の学位授与機構の設立を認可した。その中、通訳教育が進められているわずかな９校は全て英語である。日本語を代表とする英語以外の通訳人材の育成は未だに通訳教育のカリキュラム開発及び専攻設置の基礎的な段階にある（杨 2009）。

広東外語外貿大学日本語学部では、日本語能力の向上の目的で通訳課程を必修科目として1981年度にスタートした。2007年、教育部の指示に基づき、必修科目の履修単位を削減、圧縮するため、通訳課程を選択科目と変更したが、2010年に通訳の基礎的人材の育成を目的に通訳コースを設立し、履修単位を再度に拡大した。今年は通訳コースが設立されて２年目に入ったが、さまざまな課題も認識されてきた。これらの課題を洗い出し、学部生の通訳授業への期待が高まるにつれて、われわれはいかにその期待に対応し、通訳教授法を推進するか、という疑問が常々目の前に現れる。

本論では学士課程における日本語・中国語通訳教育のカリキュラム開発を目的に、通訳教育の現状をより詳しく掌握するため、広東外大日本語学部通訳コースの受講生に焦点をあて、彼らがどのような意識を持って通訳の授業を受講しているのかを中心にアンケート調査を行った。調査のデータに基づき、通訳課程設置の目的及び妥当性、人材育成の目標、通訳教授法の欠点を検討することによって、学士レベルの通訳教育における問題点をより深く議論し、さらにその問題点を明らかにしてみたい。

2．中国における日本語・中国語通訳翻訳教育に関する先行の調査研究

従来の中国における通訳教育研究は中英の通訳翻訳教育の研究に集中し、中日の通訳翻訳教育の研究が希少である（杨他 2010）。その大半は学士レベルの中日通訳教授法の考察で（徐 1994；宛 2000；孙他 2005；王 2006；杨他 2008；肖 2009）、学士レベルの同時通訳課程設置の重要性を強調し、同時通訳教授法を検討する例も少なくない（宋 2002；陈 2007）。また、2008年11月に開催された中国第3回同時通訳教育国際シンポジウムの検討に基づき、中日通訳翻訳教育のカリキュラム開発と人材育成体系を提案した考察もあった（杨 2009）。これら研究は教える教員側の視点から出発したものが多く、刘（2007）が指摘したように、ここ十年、中国における通訳研究は学習者からの視点が希少で、また、基礎データの集計が欠如である。岩本（2007）は受講生を対象にアンケート調査を行い、中日通訳教育の特徴や改善すべき点について考察したが、大学院レベルの通訳教育の考察であった。

以上の調査報告を見る限り、教員の視点から大学レベルの中日通訳教授法を考察するものが

主であることは明らかになった。教員はそれぞれの体験から学生たちの「意識」についての仮説を持っている。そこで、本論は、その個人的仮説を、実際の学生意識調査を通して検証しようとする。

3．調査方法

今回のアンケートは「2007年度実施・通訳教育分科会アンケート」(田中他 2007)[3] を利用して、広東外語外貿大学東方語言文化学院日本語学部通訳翻訳コースの三年生を対象とし、2011年３月15日にすべて記名式で実施した。調査を行った場所は第六教学楼の217教室で、当該コースに在籍していた学生の54名から一斉に回答を得た。有効回答数は53であった。アンケート結果を研究目的で使用することについては、参加者全員の同意を得た。

田中他（2007）は受講生の意識、特にそのプロフィール、およびニーズを探ることために、８問を設定した。本論では、受講生の意識とニーズを探ることによって、広東外大中日通訳翻訳教育の現状、課程設置及び人材育成の目標の妥当性を把握するため、その８問を援用した。実施したアンケートの質問は次のとおりである。

質問１．履修の理由について
質問２．現在の日本語力について
質問３．日本語力の自己評価について
質問４．海外在住、留学経験について
質問５．通訳訓練を受けた経験について
質問６．通訳関連授業で何を学び、身に付けたいのか
質問７．卒業後の進路の希望について
質問８．他にどのような日本語科目を履修しているのか

以下、調査の結果を質問別に報告する。

4．結果及び分析

4.1　履修の理由について

複数回答のため、重複して回答している学生が多いが、授業履修目的を「日本語力を高めたい」と答えている学生が49人で、92.5％と一位を占めているが、全体の９割を上回った。一方、「通訳への関心」という学生は67.9％で、「就職・留学」の学生は62.3％で、皆全体の半数を上回った（図１）。この回答により、殆どの学生が「日本語力の強化」を主な目的に通訳の授業を受講していることが明らかになった。また、履修している学生の中には、通訳への関心度が高い学生が多数存在するが、そうでもない学生も存在することが明らかになった。

4.2　現在の日本語力について

受講する学生の日本語力の状況を見てみる。この調査では日本語能力試験（JLPT）のスコアや取得級などで回答してもらった。そのなか、JLPT１級への参加度は100％に到達した。その原因は、毎年の12月に三年生全員がJLPT１級への参加を義務付けられていることにあるだ

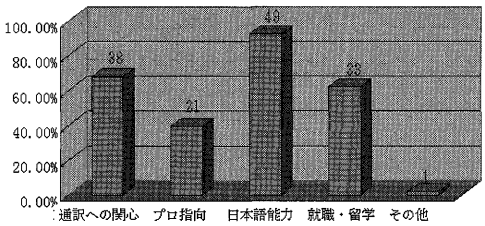

図１　履修理由

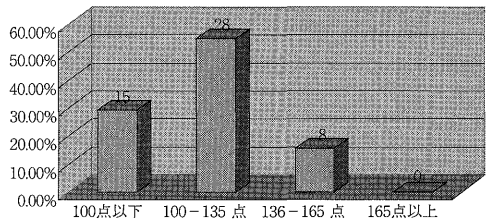

図２　JLPT１級スコア

ろう。

本論は、日本国際教育支援協会の募集資格に基づき、JLPT１級スコアを以下の四つのグループに分ける[4]（満点170点）。

その中、多数を占めたのは、100～135点のグループの28人で、次に多かった100点以下のグループの15人と合計すると、全体の84.3％を占める結果となった（図２）。一方、高得点者の中で、165点を超える学生は一人もおらず、136～165点のグループも僅か８人で、合計で全体の15.7％しか占めていないという結果になった。ほとんどの受講生は語学習熟度が低いであることが明らかになった。

4.3　日本語力の自己評価について

次に、学生は自身の日本語能力をどのように評価しているのかを考察した。その結果、「日本語はある程度の力があると思う」という学生が28人で、全体の52.8％を占めている。つまり、半数以上の学生は自分の日本語能力に多少とも自信を持っていることが考えられるだろう。一方、「日本語はとても得意」「日本語は苦手」と思う学生が極めて少ないが、「嫌いではないが得意とも言えない」という学生が26人のほぼ半数である（図３）。そのなか、「ある程度の力がある」との両者を複数選択する学生がいる。これは学生が自分の日本語力にある程度に認めているが、自分の日本語力をより一層高める必要があると思っているのであろうと推測される。

また、質問１の履修目的の結果と併せて考えてみると、「通訳への関心」と答えた38人のうち、同時に「日本語力を高めたい」と答えた人は31人である。その31人のなか、「嫌いではないが得意とも言えない」という学生が12人、「日本語はある程度の力があると思う」という学生が15人である。つまり、語学習熟度が低いから「日本語力を高めたい」と思う人もいれば、語学習熟度が高い上、さらに「日本語力を高めたい」人もいると考えられる。前者は、ただ「日本語力を高めたい」のに対して、後者は「通訳への関心」度が高いと考えられるだろう。

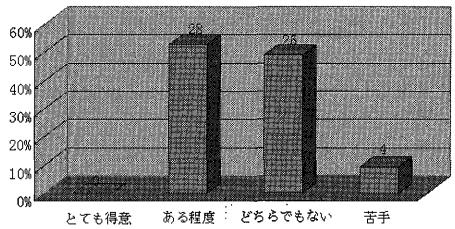

図３　日本語力の自己評価

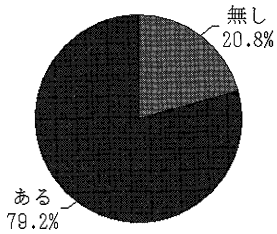

図4　受講経験

4.4　海外在住・留学経験について

海外在住、留学経験についての質問には、大学留学経験が「ある」と答えた人はわずか１人で、全体の約1.9%しか占めていない。つまり、ほぼ学生全員は海外在住及び留学体験を持っていないことが明らかになった。結果からみれば、「学生が日本文化への理解と受容」は通訳授業の難点になると考えられる。中日異文化コミュニケーションの視角からみると、異文化に対応する日本語の在り方を体得できるか、という疑問は見逃せないであろう。

4.5　通訳訓練を受けた経験について

通訳クラスを受講している学生は、これまでに通訳に関する授業や通訳訓練を受けた経験の有無を調べてみた。その結果、79.2%がすでに受けた経験があると答え（図４）、それは昨年の９月から始まった６ヶ月の通訳の授業で通訳訓練を経験していたと思っているのであろうと推測される。

4.6　授業で学びたいものについて

次に、学生たちは通訳クラスで何を学び、身に付けたいと思っているのか調べた結果、受講生の81.1%が「通訳技術やノウハウ」、69.8%が「通訳の仕事や資格に関する知識」と答えた。その一方で、「効果的な日本語の勉強法」を学びたいと答えた学生は62.3%、また「就職や留学に役立つ技能」を学びたいと答えた学生は50.9%と、皆半数を超えた（図５）。

学生たちがもっとも期待しているのは通訳法及びその周辺の知識であることが分かった。通訳クラスの設置目的は「日本語能力の強化」に止まることではなく、通訳法及び関連知識の教授を強化するところにあると考えられる。

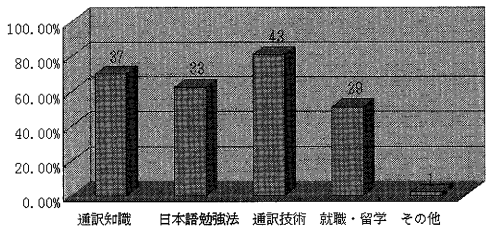

図5　授業で学びたい点

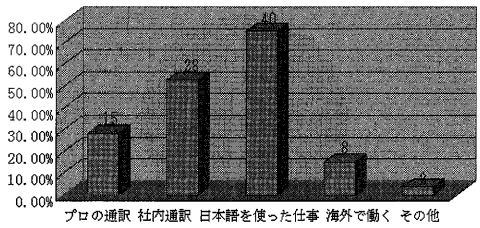

図6　卒業後の進路希望

4.7　卒業後の進路希望について

卒業後の進路に関しての質問に対しては、「通訳にならなくても、日本語を使った仕事がしたい」という解答が75.5%と大半を超えた。一方、「将来プロの通訳になりたい」という学生は、28.3%、「企業などで社内通訳になりたい」という学生は、52.8%であった。両者が合わせて81.1%と高い比率であった（図6）。その他の回答の中では、日本語教員や国家公務員の仕事に就きたいというものがあった。

卒業後、通訳者になると答えた学生は81.1%で、質問1の通訳授業の履修理由を「通訳への関心」を答えた学生の比率と全く同じであった。学生たちは、通訳者になることを希望しているから通訳クラスを履修しているという事実を改めて確認した。また、将来、プロの通訳者にならなくとも、何らかの形で日本語を使った仕事をしたいと考えている学生も数少なくない。自分の進路にとって通訳クラスで学ぶことが、何らかのプラスになるならば、との考えで受講を決めていることが推測される。

4.8　他に履修した日本語科目について

最後に、通訳クラスを受講する学生が、他に履修している科目とすでに履修してきた科目を回答の中から、代表的なものを列挙する。

現在履修している科目：高級日本語、ライティング、中日応用翻訳、視聴説、日本経済研究、日本文学、和歌俳句、日本思想史

これまでに履修した科目：初級日本語、中級日本語、日中応用翻訳、パブリック・スピーキング、日本事情、リーディング、音声学、翻訳学

このリストを見ると、精読（初級・中級・高級日本語）、「視聴説」、「リーディング」や「ライティング」などの日本語の語学学習に特化した科目だけでなく、「パブリック・スピーキング」、「中日応用翻訳」など、すでに学んだ日本語力を利用して自ら日本語を運用する能力を身につけるための科目や、「日本事情」、「日本経済研究」、「日本文学」、「日本思想史」など対象国への認識を深める科目まで、実に多岐に渡って開講されていることが分かる。学生たちは、語学の学習を基礎に、自分の関心や興味に合わせて、多種多様な科目を履修することができるなど、かなり恵まれた学習環境にあると言える。

5．考察

今回のアンケート調査により、通訳クラス受講生たちの意識について、以下のことが明らかになった。まず、ほとんどの学生は「日本語能力の強化」を受講の主目的としている同時に、「通訳技術やノウハウ」を習いたいという通訳への関心も示していること。同じクラスでは、語学習熟度の高い学生もいれば、低い学生もいる。語学習熟度の低い学生はただ「日本語力の強化」を求めているが、語学習熟度の高い学生は、「通訳への関心」度が高い。日本語能力の強化と通訳の学習という受講の目的が一致していない。この点は、今後のカリキュラムを開発する上で、見過ごせない問題であろう。また、これからの通訳教育のあり方を探るには日本語教育と通訳教育、両者の関係を十分に検討する必要もあると考えられる。

次に、語学習熟度の低い学生は、多数、通訳クラスを受講していること。広東外大日本語学部では、三年生から三つのコースが設置されたが、語学習熟度の高い学生が通訳コースではなくほかのコースに在籍している可能性があるが、通訳教員は、日本語能力が十分でない通訳コースの受講生を指導する場合に、日本語能力の養成を重視する上で通訳教育を行うというのが実情だといえよう。中途半端な形で通訳のテクニックを教えても、効果が見えず、さらに、学生を混乱の状況に陥れる危険性さえある（田中他 2007）。

また、多数の学生が将来、通訳関連の仕事に従事する要望を持つこと。そのなか、さらに、3割近くの学生がプロの通訳者を希望している。教員として、通訳法の教授のほか、通訳の仕事や資格に関する知識の教授にも注目すべきである、との提言が既になされている（王他 2010）。学生をいかに通訳の道に導き、社会ニーズに応じる通訳人材に育成することはこれからの通訳教育において、見過ごせない重大な課題になるのだろう。

中国における通訳専攻は外国語学科の必修課程ではなく、一学科として発展してきた。通訳教育に従事する教員は教授している通訳授業が通訳学科の課程か、外国語学科の通訳必修課程か、あるいは、外国語学科における通訳コースの課程か、どちらであることを認識しなければならない（仲 2007）。広東外大日本語学部の通訳教育は外国語学科における通訳コースの課程として位置づけられるのが妥当であると考えられる。

しかし、社会側のニーズと学生側の要望からみれば、通訳コースの設立はその必要性が認められているものの、日本語力が低下する学生たちを対象として通訳の授業を実施しているのが実情である。このような状況の中で、あえて「通訳」の授業を続ける意義はあるのだろうか。もしあるとすれば、日本語教育と通訳教育、どの面に比重を置き、対応すればよかろうか。現在、中国の大学における学士レベルの通訳教育に見逃すことができない問題である。通訳実技の訓練と言語力の強化を共に重視すべきだという意見があるが（刘 2009）、実際に、言語面に比重が置かれており、通訳訓練法を援用した日本語教育を行う例が少なくなかろう。

問題の解決には、以下のような対策が考えられる。一つは、学生の日本語力の低下を認め、従来とは異なる、新しい「理論的枠組」を導入し、通訳教育を単なる語学訓練という狭い枠組みの中でとらえるのではなく、通訳訓練を通して、異なる文化間のコミュニケーターとしての役割を果たすことができるような人間を育てる、という考え方である（田中他 2007）。通訳の

授業に当たっては、単なる語学訓練や訳出スキルの習得に終始することなく、それらの訓練を通じて、異文化コミュニケーターとしての基礎的な能力を習得することができるようになる（稲生他 2005）。もう一つは、学生の日本語力を確保するため、一定レベル以上の言語力、通訳・翻訳実習などの修了用件を必要とする前提で通訳教育を進める考え方である（柴原他 2010）。

広東外大日本語学部通訳コースにおける人材育成の目標は各領域の通訳現場に応用できる通訳の「通才」であると設定されているが、語学習熟度が低い学生たちを対象として通訳の授業を実施している現在の状況からみれば、適切ではなかろう。姜（2006）が指摘されたように、中国の大学における人材育成の目標が適切に定められていないのは、「通訳」、「通訳人材の育成」、「通訳教育」などの概念への認識が明らかにされていないからである。そのゆえ、今後は、上述の二種の対策の取り入れを考えたうえで、さらに人材育成の目標設定を調整する必要があると考えられる。

6．終わりに

今回実施したアンケートは、中国における日本語・中国語通訳翻訳教育に関する初めての試みであり、通訳クラスを受講している学生の意識およびニーズを探ることに焦点を当てて実施した。そのため、通訳教育に関する多くの疑問に答えるには甚だ不十分なものである。しかし、これまで解明されていなかった、受講生の意識の一端が明らかになったことが、今後、中国の通訳教育を実践していく上で貴重な収穫になったものと考える。

今後の課題として、今回の調査に触れていない通訳教育を担当する「教員」と、通訳の「授業」を対象に、継続してデータの集計を進めると考える。また、データの集計により、中国における中日通訳翻訳教育の現状を全面的に把握したうえで、直面した多種なる問題の解決に役立つと考えられる。

引用文献

徐冰（1994）「口译课教学初探」『东北师大学报（哲学社会科学版）』第6期：92-94.

宛金章（2000）「学以致用——日语口译教学探讨」『日语学习与研究』第2期：43-46.

宋协毅（2002）「论汉日双语同声传译教学的改革与发展」『外语与外语教学』第1期総154期：41-44.

孙颖他（2005）「实践与日语口译教学」『黑龙江教育学院学报』第24卷第5期：138-139.

王颀（2006）「口译理论与日语口译教学实践初探」『上海翻译』第1期：42-45.

姜秋霞（2006）「翻译专业建设现状：分析与建议」『中国翻译』第27卷第5期：8-13.

刘绍龙（2007）「对近十年中国口译研究现状的调查与分析」『广东外语外贸大学学报』第1期：37-40.

陈安丽（2007）「以同声传译为目标，造就国际化人才——关于高校日语翻译课程培养目标的探讨」『山东外语教学』第6期総第121期：81-83.

仲伟和（2007）「专业口译教学的原则与方法」『广东外语外贸大学学报』第3期：5-31.

杨晓辉他（2008）「日语口译教学中笔记训练环节的问题与思考」『大连民族学院学报』第10卷第6期：573-574.

肖爽（2009）「谈日语口译教学中的“视译”」『日语学习与研究』第3期総142号：73-78.

杨玲（2009）「口译人才培养教学体系之探讨——第三届同声传译翻译教学国际学术研讨会专题讨论引发的思考」『日语学习与研究』第4期総143号：65-71.

刘和平（2009）「论本科翻译教学的原则与方法」『中国翻译』第6期：34-41.

王丽莉他（2010）「日语翻译教学改革的几点思考」『吉林省教育学院学报』第26卷第10期：63-64.
杨晓辉他（2010）「再议国内日语口译研究的现状与发展趋势」『大连海事大学学报（社会科学版）』第９巻第５期：109-111.
稲生衣代他（2005）「通訳教育のパラダイム――異文化コミュニケーションの視点に立った通訳教育のための試論」『通訳研究』第５号：73-109. 日本通訳学会
岩本明美（2007）「北京語言大学日中同時通訳修士課程における通訳実習の特徴と課題」『通訳研究』第７号：231-251. 日本通訳学会
田中深雪他（2007）「通訳クラス受講生たちの意識調査～2007年度実施・通訳教育分科会アンケートより～」『通訳研究』第７号：253-263. 日本通訳学会
柴原智幸他（2010）「大学学士レベルにおける通訳翻訳課程――アンケート・インタビュー調査による神田外語大学生の認知分析」『通訳研究』第10号：243-258. 日本通訳学会

注

1 通訳翻訳学科は1級学科外国語言文学の２級学科である。中国教育部『学位授予和人才培养学科目录(2011年)』による。(URL：http://www.moe.gov.cn/publicfiles/business/htmlfiles/moe/moe_834/201104/xxgk_116439.html)

2 通訳翻訳修士（MTI）は Master of Translation and Interpreting の略称で、通訳翻訳業界の特殊なニーズに応じて、応用型の人材を育成するために設立した。

3 本稿のアンケートは2007年度の日本通訳学会の通訳教育分科で実施したアンケートを元に、広東外大日本語学部の通訳コース受講生の状況に従い、調整したものである。元アンケートの「現在の英語力」を「現在の日本語力」に、「英語力の自己評価」を「日本語力の自己評価」に変更した。

4 日本国際教育支援協会は平成23年度の奨学生応募資格を、日本語能力試験Ｎ１を受験し、165点以上の成績を修めた者とした。但し、中国・韓国・台湾以外の国・地域を母国とする者は135点以上とした。本論はその資格に基づき、「100点以下」、「100～135点」、「136～165点」「165点以上」という四つのグループに分けて、「優秀」、「良好」、「一応の水準」、「不良」の水準に対応する。(URL：http://www.jees.or.jp/foundation/jlpt-scholarship.htm)

（原稿受理　2011年９月20日）